



日本音楽教育学会ニュースレター

目次

1 会長退任のご挨拶.....	2
2 会員の窓	
2-1 平成 25 年度全日本音楽教育研究会全国大会 兵庫大会（総合大会）報告.....	2
2-2 新任教諭にインタビュー！ —東京都足立区立花保小学校・東小路恵美先生—.....	3
2-3 日本学術振興会「外国人招へい研究者事業」： Graça Boal Palheiros 氏の招聘.....	5
3 新刊紹介	
3-1 『授業のための日本の音楽・世界の音楽～世界の音楽編』 & 『同～日本の音楽編』.....	6
4 報告・お知らせ	
4-1 平成 25 年度第 4 回常任理事会並びに引継常任理事会報告.....	7
4-2 第 7 回夏期ワークショップのご案内.....	11
4-3 編集委員会報告.....	12
4-4 国際交流委員会から.....	13
5 事務局より	
5-1 お知らせ.....	13
編集後記	

【日本音楽教育学会事務局】

所在地：〒184-0004 東京都小金井市本町 5-38-10-206

TEL&FAX：042-381-3562 E-mail：onkyoiku@remus.dti.ne.jp

私書箱：〒184-8799 東京都小金井郵便局私書箱 26 *郵便物は私書箱へ

開局時間：月・水・金（9：00～15：00）

1 会長退任のご挨拶

日本音楽教育学会会長 加藤 富美子

2010年4月から2014年3月まで2期4年間にわたり会長をつとめさせていただきました。今、退任の時を迎え、この4年間の振り返ってみたいと思います。

本学会の運営にあたり、めざしたのは以下の点でした。

第1は、「みんなでつくる学会」にすることです。会員数1,500人を越えるわが国でもっとも大きな音楽教育の学会として、会員一人ひとりが学会という場で発表し合い、語り合い、学び合い、情報交換し合うことを、より活性化する方策を考えていくとしました。

第2は、「研究と実践をつなげる学会」にすることです。学会として、研究と実践のつながりを改めて確認しながら、研究が実践に生かされ、実践が研究に生かされるようにしていくとしました。特に2期目には、1) 社会に発信する学会、2) 社会に役立つ学会となることをめざしました。

上記の目標の達成に向けて会員みなさまに大変な活躍をしていただき、この4年間で以下のような成果をあげることができました。

第1の「みんなでつくる学会」の成果としては、まず、若い世代の多彩な力が生かされるようになったことです。広報や総務などで若い参事さんが存分に活躍しています。また、「音楽教育支援ポータルサイト」や「音楽教育ゼミナール」では若手の運営メンバーが学会と社会の架橋、研究と実践の架橋の役割を担っています。

次に、学会誌『音楽教育学』ならびに『音楽教育実践ジャーナル』への論文投稿数と掲載数の増加があげられます。広報委員会によるニュースレターならびにHPの内容充実も大きな成果でした。そして、大会での研究発表や共同企画の増加は、「みんなでつくる学会」の基本としてあげることができます。

第2の「研究と実践をつなげる学会」にすること、その中でも1) 社会に発信する学会、2) 社会に役立つ学会の具体的な成果としては、間もなく刊行される予定の日本音楽教育学会編『音楽教育にかかわる人の倫理ガイドブック』をあげることができます。「研究と実践をつなげる学会」については、まだ十分な成果をあげていないとはいえませんが、常任理事会企画のプロジェクト研究のテーマとして継続して検討されていく予定です。

学会運営の事務的な面では、事務局長ならびに担当理事の果敢な挑戦のもと、この4年間に大きな革新がはかられました。経費の徹底的な見直しによる経費節減、WEBシステムによる入会者や学会参加者の管理、会員管理の見直しならびに会員名簿作成などなどです。

会員みなさまの大変なご尽力のおかげで、会長退任の時をととても清々しく迎えることができますことを心から御礼申し上げます。本当にありがとうございました。

2 会員の窓

2-1 平成25年度 全日本音楽教育研究会全国大会兵庫大会（総合大会）報告

静岡大学 長谷川 慎

去る平成25年6月20日（木）～21日（金）に全日音研神戸大会が兵庫県において開催されました。総合大会は隔年開催となっており、今大会は平成23年度の札幌大会につづく大会です。今回の大会主題は『～つながる音・人・心～』。なお各部会ごとの主題が以下の通りです。

幼稚園部会主題	『音がいっぱい リズムがいっぱい 友だちいっぱい』
小学校部会主題	『だからすき！つたえあおうよ 音楽のたのしさを』
中学校部会主題	『育てよう 感じる心と 確かな力』
高等学校部会主題	『音楽が育てる生きる力 今こそ伝える音楽の力』
特別支援学校部会主題	『心躍る音 心に寄り添う音』
大学部会主題	『自律と協働の力をはぐくむ音楽教育のあり方』

「平成 25 年度はすべての校種において、新学習指導要領が完全実施されると同時に、新たな教育課題に向き合っていく始まりの年」（兵庫大会会長 中西昭人氏）ととらえられた今大会は、開催決定より約 2 年間にわたって、神戸市の先生方を中心に研修・実践が繰り返し行われた成果が発表されました。

大会初日は生憎のお天気となりましたが、神戸駅を起点とした市内各地の会場には全国から 3000 人を超える多くの参加がありました。大会 1 日目夜には恒例のレセプションが新神戸駅前の「ANA クラウンプラザホテル神戸」で開催されました。兵庫といえば「日本一の酒所・灘」を有する県。会場では地元酒造組合の協賛により数多くの清酒が振る舞われ、おいしい料理に舌鼓をうち、和やかな懇親の場となりました。

大会 2 日目は会場を西宮市の兵庫県立芸術文化センターKOBELCO 大ホールに移し、今大会の研究の概要について提案と来賓者の大熊信彦氏、津田正之氏（国立教育政策研究所教育課程研究センター研究開発部教育課程調査官・文部科学省初等中等教育局教育課程課教科調査官）から指導講評がありました。

会場となった兵庫県立芸術文化センターは、指揮者・佐渡裕氏が芸術監督をつとめるホールであり、KOBELCO 大ホールは全面が木の無垢材で造られた大変響きの良い会場でした。そこで行われた地元兵庫県の子どもの演奏は、吹奏楽、合唱、ジャズバンドと盛りだくさんの演目であり、大変レベルの高い演奏でした。研究演奏に続く全員合唱は、フィナーレとして会場参加者全員で『しあわせ運べるように』を歌いました。阪神淡路大震災の際に、この歌を歌う子どもたちの歌声が、多くの被災された方々の心を癒しました。この曲を作詞・作曲したのは、当時、神戸市立吾妻小学校で音楽を教えていた臼井真氏（神戸市立西灘小学校教諭）。演奏に先立ち臼井氏によるこの曲の誕生秘話、そして全国、世界へと広がっていったお話が披露され、感動の余韻を残して大会は閉会しました。

次の総合大会は平成 27 年に静岡市で開催されます。全体主題は『広がれ音楽 つながれ心』。大学部会は『つながれ音楽 ひろがる心 ～理論と実践の往還～』として皆様をおむかえする準備を開始しました。日時は平成 27 年 10 月 29 日（木）～30 日（金）。世界遺産・富士山が美しく見える季節です。多くの皆様の参加を主催者一同お待ちしております。

2-2 新任教諭にインタビュー！—東京都足立区立花保小学校・東小路恵美先生— 福岡教育大学 山中 和佳子

2 月の前半に降った大雪の名残がまだあちこちに残る中、東京都足立区の花保小学校に 2013 年度から新任教諭として着任された東小路恵美先生にお話を伺ってきました。

—今年度花保小学校に勤めるまで、学校現場に関わってきたことはありますか？

大学院の 2 年間、福岡県宗像市の小学校で週 2 日ほど音楽の非常勤講師として、授業を行っていました。2 年間授業を行う中で具体的な教え方や手立てが私の中で少しずつできてきたし、小学校とも協力して実践することができました。この経験を大学

院時代にしていたことが、とてもよかったなと今思っています。

—花保小学校の特色を教えてください。

花保小では、小中連携を進めています。すぐ隣に中学校があるのですが、各学校の先生が行き来して、授業を見たり意見交換をしたりしています。小・中の連携によって中一ギャップをなくそうということで力を入れているんです。音楽科の連携はこれからののですが、花保小には金管バンドがあるので、中学校の吹奏楽部との交流もしたいと思っています。あと、中学校の合唱コンクールの審査員を務めています。今年の6年生が卒業すると来年のコンクールで教え子の成長を見ることができるので、それも楽しみです。

—金管バンドというお話が出ましたが、どのような活動をされているのでしょうか。

花保小では、学校での活動の一環として金管バンドをやっています。メンバーは、4年生以上からオーディションで選びます。人気があって希望する子どもがすごく多いんです。現段階の人数は37人ですが、来年からはもう少し増やそうかなと考えています。

演奏の機会ですが、5月の運動会の後9月以降ほぼ毎月本番があります。2月には合唱合奏研究演奏会という演奏会があって、これは立派な区のホールで演奏できる機会なんです。実は、昨日この演奏会に出演していたんですよ。

—金管バンドの活動で面白いところはどんなところですか？

私は、花保小で金管の指導に初めて取り組んだので苦労することも多いのですが、みんなで音楽を作り上げることがとても面白いですね。1パートごとの音符を頑張っ
て音にしてから全員で合奏した時、それまでCDで聴いていた音楽が、上手に演奏できていなくてもぼんやり見えてくる瞬間ってありますよね。その音楽が生まれるような瞬間に、何とも言えない感動がありますね。子どもは合奏することが大好きなんです
が、みんなで合奏しながら音楽を作っている、その面白さで子どもたちは頑張っ
て続けているのかなと思います。

—音楽科の授業の中で、何か工夫されていることはありますか？

音楽は表現の教科なので、気持ちが解放されていないと声も出ないんですよ。だから私は、常時活動等でできるだけ気持ちを解放させることにしています。今の子どもたちってアップテンポでノリのいい曲が好きじゃないですか。なので、最近よくCMで使
用される洋楽があるのですが、それを流してリズム遊びをします。音楽に合わせて手拍子をして、全員揃って拍のスピードが分かったら、4拍分教師が叩いたリズムを子どもが真似して叩くんです。それから、音楽に合わせて徐々にリズムを変えたり色んな体の場所を叩いたりして、最終的にダンスみたいになってリズムを叩くんです。それがとても楽しくて、子どもは喜ぶんですよ。たくさん動いて笑って、あー疲れたっ
ていうときに、じゃあ声を出そうかと言って発声につなげていく、そんな活動から授業を始めています。

—リズム遊び、面白い活動ですね。他にはどんなことを大事にされていますか？

子どもによっては、音楽活動を積極的にできない子どももいます。なので、給食時間などにクラスに頻繁に行って、子どもとの関係を作ろうとしています。専科なので週一回しか合わないから、授業の中だけで子どもとの信頼関係を作ることは難しいと思います。ですので、昼休みに一緒に遊んだり休み時間に話しかけたりして、子ども

との関係をなるべく作るようにしています。

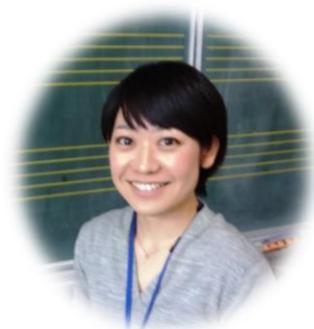
あと授業の中で大事にしていることは、1時間の授業の中にリズム、技能的なこと、器楽、歌唱等できるだけ様々な活動を取り入れることです。歌は大好きだけど楽器が苦手な子ども、または楽器が大好きだけど歌が苦手な子どももいますし、音楽を習っている子は理論系も好きなので。授業のねらいは一つなのですが、みんなが満足するためにいろんな活動を関連させながらちょっとずつ授業の中でやりたいんです。なかなか難しいのですが、これが私の目指していることです。

—最後に、今後の課題などはありますか？

来年度は、子どもにもっと自由に音楽を自分で操る楽しさを味わわせたいと考えています。もうちょっと子どもが主体的に活動できるような学習場面の設定をつくるのが、今年を振り返った上での来年度の課題ですね。

東小路恵美（ひがしこうじめぐみ）先生

長崎県出身。福岡教育大学中等教育教員養成課程音楽専攻卒業、福岡教育大学大学院教育学研究科教育科学専攻音楽教育コース修了。在学中に遼寧師範大学（中国）、釜山教育大学校（韓国）へ留学し、アジアの民族音楽や音楽教育システムについて学ぶ。修士論文のテーマは「音楽の授業で形成される音楽に対する苦手意識の研究—学習性無力感の理論に基づく苦手意識形成要因の分析—」。



【取材を終えて】

インタビューでは、きらきらした瞳で教育実践や研究に関すること、はたまた好きなスポーツのことなど、様々なことへの興味をお話し下さいました。全ての子どもたちが音楽を楽しく学べるように、真摯に取り組んでいる様子がとても印象的でした。

2-3 日本学術振興会「外国人招へい研究者事業」：Graça Boal Palheiros 氏の招聘 明治学院大学 水戸 博道

昨年11月から12月に、日本学術振興会の「外国人招へい研究者事業」の基金を得て、ポルトガルの音楽教育研究者 Graça Boal Palheiros 氏を招聘した。Boal Palheiros 氏は、現在ポルト工科大学で教鞭をとるかたわら、ISME の常任理事や research commission の理事を歴任してこられた。ポルトガル音楽教育界の重鎮である。今回の招聘の主目的は、Boal Palheiros 氏と私とでここ数年間行っている若者の歌唱行動の研究を深めることであつた。これまで、地理的な問題で、研究討議をメール等に頼らざるを得なかったが、実際に対面でじっくり議論を進めることができたのは、とても有意義であつた。我々の研究は、若者が歌を歌う意味をアンケートや聴き取り調査によって明らかにしようとするもので、2カ国で収集した言語的データを、同じ基準で分析・比較するためには、今回のような対面での検討は必須であつたといえる。昨今、海外研究者との共同研究がさかんに行われるようになったが、メールやスカイプで便利に共同研究ができるようになった一方で、やはり、研究の本質的な検討には、時間をかけた対面での議論が必須であることを改めて認識させられた。

招聘研究者は、受け入れ研究者との共同研究の他に、大学などの研究機関で講義や講演を行うことが求められている。今回は、小川容子氏、杉江淑子氏、坪能由紀子氏の協力を得て、それぞれ岡山大学、滋賀大学、日本女子大学で講義や講演を行った。最初に訪問した岡山大学では、修士課程の大学院生が英語で自分の研究を発表。小川容子氏の猛特訓を受けた院生のレベルの高さに Boal Palheiros 氏も舌を巻き、さなが

ら、ミニ国祭セミナーの様相を呈した。滋賀大学では、ポルトガルの歌とダンスのワークショップを学部生に行ってもらい、引き続き、ポルトガルの教員養成についてのセミナーを行った。滋賀大学の現職教員の院生から、次々と鋭い質問が投げかけられ、ポルトガルと日本の教員養成が抱える“内情”を共有することができ、予定時間を大幅に超えて議論が続いた。日本女子大学では、鑑賞教育に関する Boal Palheiros 氏のメソッド「Active Music Listening」を紹介してもらった。このメソッドは、音楽鑑賞において音楽構造の理解を深めるために、身体活動を含めた主体的な活動を行うメソッドであるが、現在、坪能氏を中心に進められている「音楽理解における標題と表題」のプロジェクトともからませて、鑑賞教育に関する Boal Palheiros 氏の本音を聞き出すことができ、大変有意義な会となった。

こうした招聘プログラムの実施は、来日する研究者と受け入れ研究者の両方とも公務を抱えており、決して容易なプログラムではない。実際、Boal Palheiros 氏は、授業期間の真っ最中で、現職の教員への授業を夜の 11 時まで行わなくてはならない中、補講等のやりくりをして来日して下さった。私自身も、招聘研究者をきっちり“おもてなし”するには、1ヶ月は少々長かったというのが正直な気持ちで、小川、杉江、坪能各氏の協力なしに今回の招聘事業を行うことは難しかったと思われる。しかし、自分の研究、そして各大学で行った講演等、時間の制約なく海外の研究者と討議を重ねることができたのは、この上ない貴重な経験だった。また、岡山大学の大学院生の奮闘に見られるように、留学経験のない若い人たちも、努力次第で言葉の壁を乗り越えられる可能性が高いことを強く感じた。最終日に行われた明治学院大学教育発達学科の1年生の講義でも、何人かの学生がコメントペーパーを自主的に英語で提出するという、うれしいサプライズがあった。今後、国際交流をさらに積極的に行っていこうと、気持ちを新たにした次第である。

3 新刊紹介

3-1 『授業のための日本の音楽・世界の音楽～世界の音楽編』 & 『同～日本の音楽編』 文教大学 島崎篤子・東京学芸大学 加藤富美子

『世界の音楽編』音楽之友社、2013年10月10日刊行、全136頁 2,400円+税、
ISBN978-4-276-32155-7

『日本の音楽編』音楽之友社、2014年1月31日刊行、全135頁 2,400円+税、
ISBN978-4-276-32154-0

この二冊の本は、1999年に出版した『授業のための日本の音楽・世界の音楽』を二分冊にした改訂増補版です。

音楽科の場合、系統性が明確な教科と違って、自分で教材や題材を工夫する余地が残されている反面、新しい題材開発や年間指導計画における位置づけ等に関する教師の力量が問われます。教育現場においては、とりわけ世界や日本の音楽の題材化は教師の頭を悩ます課題の一つになっています。

本書は、こうした課題に多少なりとも役立ちたいという思いから執筆した、タイトルどおりの「授業のための」本です。



『世界の音楽編』の目次	『日本の音楽編』の目次
第1章：世界の音楽と友達になるために 1. 音楽の世界を広げるポイントと窓 2. 「世界の音楽」の多様性・共通性・独自性 3. いろいろな学習活動 第2章：身近なアジアの音楽 1. 竹の国・フィリピンの音楽 2. お隣の国に「こんにちは！」 3. 長い歴史を誇る中国の音楽 4. 神の国・インドネシアの音楽 5. 悠久の国・インドの音楽 第3章：広がりのある世界の音楽 1. 広大で多彩なアフリカの音楽 2. 遠くて近いブラジルの音楽 3. 情熱の国・スペインの音楽	第1章：日本の音楽と友達になるために 1. 音楽の世界を広げるポイントと窓 2. 「日本の音楽」の特徴 3. いろいろな学習活動 第2章：エネルギッシュな民俗音楽 1. 祭囃子の音楽 2. 「ぞめこう！」阿波踊り 3. 南国・沖縄音楽の楽しみ 第3章：古くて新しい伝統音楽 1. はじめての箏 2. 雅楽ワールド 3. 幽玄と笑いの能・狂言 4. 人形が呼吸する文楽 5. 傾いて歌舞伎

第2・3章の各項目は、「知る」（対象とする音楽についての知識や情報）、「体験する」（〈声を出そう、聴こう・見よう、演奏しよう、動こう、つくろう〉の5つの学習活動）、「広げる」（対象とする音楽学習の発展的な展開や対象とする音楽の新動向など）の3つの視点で構成してあります。多忙な先生方でも、「知る」の授業に必要な基本的な知識や情報を基に、「体験する」の様々な学習活動を自由に取り込んだり、自分のアイデアを加えたりして、独自に題材化することができます。小学校から高等学校の音楽の授業だけでなく、日本や世界の音楽に関する学生参加型の大学の授業にも活用しやすいような構成を心がけました。本書の情報や学習活動のアイデアを、充実した授業づくりのために活用していただけると幸いです。

4 報告・お知らせ

4-1 平成25年度第4回常任理事会並びに引継常任理事会報告

日時：平成26年2月22日（土）14時～18時

場所：聖心女子大学マリアンホール1階グリーンパーラー

出席者：加藤，有本，今川，島崎，奥，寺田，北山，今田，水戸，小川，伊野（記録）

加藤会長が入試関係の仕事で遅れたため有本副会長の挨拶の後、報告事項に入った。

【報告事項】

1 会務報告（今川）

平成25年10月12日から今年度末までの予定が報告された。

10月12日， 13日	平成25年度総会（弘前大学） 日本音楽教育学会第44回（弘前）大会
12月24日	『音楽教育学』第44巻第2号， ニュースレター第54号発送
2月16日	平成25年度第4回編集委員会（東京芸術大学上野キャンパス）
2月22日	平成25年度第4回常任理事会（聖心女子大学） 引継のための合同常任理事会（同上）

【今後の予定】

2月23日	倫理綱領作成委員会
3月27日	『音楽教育実践ジャーナル』 vol. 11 no. 2, ニュースレター第55号発送
3月31日	平成25年度会計決算

2 会計報告

(1) 立教ゼミナール会計報告 (佐野→今川)

資料に基づき、報告があった(9頁参照)。

(2) 第44回弘前大会 会計報告 (今田)

資料に基づき、報告があった(9頁参照)。

(3) 平成25年度会計中間報告 (奥・島崎)

資料に基づき、今年度会計の見通しについての報告があった。倫理ガイドブックは本年度内に決済を終えるが、次年度の6月発行学会誌の別冊として会員に届ける。この他、会費未納の会員がいること、ジャーナル発行費が赤字となったこと、プロジェクト研究がゼロであることが指摘された。プロジェクト研究については、別途、担当の寺田理事より経費申請があること、併せて翻訳費の使途について検討された。

3 各委員会報告

(1) 編集委員会 (伊野)

2月16日の編集委員会について報告があった。

- ・投稿原稿15本(うち音楽教育実践ジャーナル8本、音楽教育学7本)、音楽教育実践ジャーナルはすべて論文、再査読4本、掲載不可4本となった。音楽教育学は、再査読論文3本のうち修正採択2本、掲載不可1本となった。新規投稿4本(論文3本、研究報告1本)のうち、論文2本と報告1本が再査読、論文1本が掲載不可となった。
 - ・今年度ジャーナル発行費が予算を圧迫した件について、進捗状況表をもとにした予算と頁数の一元管理の対策と方法について説明があった。また、編集委員会担当の事務方の仕事について、多忙化の現状と解消の対策について要望があった。
- この後、次のことが話し合われた。

- ☆今後、編集委員会の進捗状況表をもとに予算内で収めていただきたい。ただし消費税の値上がり分に対しては次年度の補正予算で対応する。依頼原稿と投稿原稿のバランスについて一層考慮して欲しい。会員投稿原稿の掲載がより多くなるように努力を継続して欲しい。
- ☆音楽教育実践ジャーナル誌が発刊後10年以上を経過したことに鑑み、今年度中に検討委員会を立ち上げ、ジャーナルの性格やあり方について検討する。
- ☆事務方の業務に関しては事務局で検討する。

なお、音楽教育実践ジャーナル vol. 12 no. 2 (通巻24) の特集テーマについて、後日MLで報告が行われた(12頁参照)。

(2) 国際交流委員会 (今田)

ゼミナール等を活用し、英語による研究発表の方法についての勉強会を来年度も継続していきたい。

(3) 広報委員会 (小川)

ニュースレターの締め切りは、2月末日なので、原稿を考えている人は、それまでに送っていただきたい。

(4) 倫理綱領作成委員会 (加藤)

現在ガイドブックの作成の作業に入っており、原稿が集まりつつある。まもなく、サンプルプロセスへ見積もりを依頼する段階になっている。

(5) 音楽文献目録委員会 (木間→今川)

資料に基づき、158のリストより文献選定がなされたこと、IAML ウィーン会議の開催、『音楽文献目録』第41号の刊行、検索システム・プログラムの構築に関するプロジェクトの進捗状況が報告された。また、団体からの助成金については、引き続き検討することとなった。

【立教ゼミナール会計報告】

第12回 音楽教育ゼミナール 会計報告					
収入の部			支出の部		
	項目	金額		項目	金額
収 入	参加費	¥195,000	支 出	講師謝礼	¥130,000
	平成25年度ゼミナール補助金	¥300,000		アルバイト代	¥20,400
	懇親会参加費	¥81,000		テープ起こしバイト代	¥10,000
	利息	¥6		交通費	¥50,000
	計	¥576,006		当日お弁当	¥30,000
				教材費	¥5,040
				懇親会費	¥75,000
				お茶菓子	¥3,522
				雑費	¥5,143
				学会本部に返金	¥246,901
				計	¥576,006
2013年9月6日 第12回音楽教育ゼミナール決算を上記の通り報告いたします。					
会計担当 村上康子 (印省略)					
2013年9月6日 会計監査の結果、帳簿と相違ないことを認めます。					
会計監査 本多佐保美 (印省略) 藤井 康之 (同上)					

注) 常任理事会当日は支出の明細ならびに会計担当者・監査の押印のある原本のコピーを資料として配布した。

【第44回弘前大会会計報告】

平成25年度 日本音楽教育学会第44回大会(弘前大会) 収支決算報告書					
収入の部			支出の部		
費目	金額(円)	備考	費目	金額(円)	備考
通帳作成時の入金	1,000		会場借用費	112,786	
学会本部からの準備金	700,000		大会ホームページ制作費	91,350	
弘前市コンベンション観光協会助成金	350,000		大会ポスター作成費	35,700	
企業協賛広告収入	250,000	県内企業1社, 全国企業7社	大会ポスター・大会プログラムデザイン費	15,000	
企業ブース出展収入	120,000	6社	懇親会費	430,600	
懇親会参加費	720,000	5,000円×144名	懇親会アトラクション費	10,000	
臨時会員参加費	221,000	5000円×40名, 3000円×7名	大会実行委員交通費	60,000	
利息	24	8月10日付	弁当代(大会実行委員, 学生アルバイト)	77,235	
収入合計	2,362,024		基調講演講師関係(謝金、交通費、宿泊費)	173,000	
			基調講演講師 送迎費	2,000	
			通訳アルバイト謝金	15,000	
			シンポジウムパネリスト謝金	30,000	
			会議費	19,320	
			大会備品代	38396	用紙、インク、文房具等
			通信費	19,550	ポスター発送等
			学生アルバイト賃金	530,000	26名(幹部アルバイト含む)
			観光コンベンション協会紙袋	50,000	
			大会雑費	4,620	振込手数料等
			通帳作成時の入金分の返金	1,000	
			学会本部への返金	646,467	
			支出合計	2,362,024	

4 関東地区例会の中止について (山本→今川)

2月15日開催予定であった関東地区例会は、大雪のため講師もパネリストも到達できない状態で、中止となった。その旨ホームページに掲載するとともに、案内pdfを削除した。経費については、すでに使用したものを差し引いての返金となる。

5 事務局から（今川）

(1) 会員情報管理の今後について

資料に基づいて説明があった。会員データベースの項目のうち、「公開可否」は削除し、「名簿掲載可否」のみとする。

(2) 今後の事務局運営へご協力をお願い

事務局二人体制でとても努力している。外注と電子化（グーグルドライブ、グーグルフォームの活用など）によりいっそう省力化する方向である。

(3) 来年度事務局体制について

亀山さん、坂本さんに引き続いてお願いする。HPについては、長山さんに継続依頼する。

【審議事項】

1 第45回大会について

(1) 大会実行委員会について（今川）

組織は次のように考えている。

実行委員長：今川恭子，副実行委員長：水戸博道，

実行委員：安久津太一，有本真紀，木村充子，越山沙千子，斉木美紀子，長井覚子，
福岡亨子，村上康子，山原麻紀子

(2) プロジェクト研究（伊野・寺田）

昨年の継続研究をプロジェクト研究Ⅰとして実施する。新規プロジェクト研究については、次期常任理事に依頼する。5月に素案提出の予定。

(3) 日程，研究発表の割り振り等について（伊野・寺田）

昨年を踏襲しつつ計画中。学長の岡崎淑子氏が復興について講話予定。「文化の継承と創造」（仮）をテーマとして計画中。

(4) 研究発表応募要領（今川）

- ・資料に基づいて説明があり，微調整の上承認された。
- ・JTBに依頼した場合，個人発表と共同企画の二つの入口で価格がアマリス2台分のシステム料金となることと，共同企画の応募が増えている状況に対応するため，共同企画の申込は，e-mailによる申込書送付方式に戻す。
- ・共同企画の締め切りは，6月22日24時必着。
[ここから次期常任理事（三村，中地，杉江，本多）も加わっての協議]
- ・共同企画の選考，学会誌への掲載については，次期委員会に継続審議。

(5) 大会実行委員会との覚書（次期に引継ぎ）

- ・資料に基づいて審議，了承された。なお，「大会実行委員会が準備するもの」の中に「大会ホームページ制作費」を入れる。

2 第46回大会について（加藤・小川）

九州地区にて開催予定。

3 第7回夏期ワークショップについて（確認のみ）

- ・千葉大学教育学部にて「長唄ワークショップ in 千葉」を開催する。
- ・企画担当常任理事へ戻すことをふくめ，ワークショップの実施方法については，来年度の継続審議となった。

4 会則改定（本学会の目的）に関して会員からの意見について

- ・本学会の目的について，会員からの意見として，北山理事から検討についての提案があった。指摘された事項は，以下の2点である。

目的が一つだけなのに「次の通り」とするのは常識的でない。

「目的とする」の文言の重なりに違和感がある。

- ・指摘されたことについては，次期理事会において，理事提案として検討する。

5 新入会員及び退会者について（今川）

以下の資料の通り，承認された。

新入会員（平成 25 年 10 月 11 日常任理事会以降）：21 名

【平成 26 年 2 月 10 日現在 正会員数 1549 名 学生会員数 1 名 特別会員数 3 名】

この後、それぞれの担当理事で新理事と引き継ぎをし、終了した。

* 次回（平成 26 年度第 1 回常任理事会・理事会）は、平成 26 年 5 月 11 日（日）於立教大学、開始時刻は未定。

4-2 第 7 回夏期ワークショップのご案内

日本音楽教育学会第 7 回夏期ワークショップを、「長唄ワークショップ in 千葉」と題して、8 月 21 日、千葉大学にて開催します。

◆開催日：平成 26（2014）年 8 月 21 日（木） 午前 10 時 30 分～午後 4 時 30 分
◆会場：千葉大学教育学部 音楽棟

講師は、長唄三味線演奏家の東音山田美由紀氏を中心に、一般社団法人 長唄協会の全面的なご協力のもと、お願いしております。

長唄「娘道成寺」を教材として、長唄の唄や楽器の体験と、一流の講師陣（約 10 人）による生演奏の鑑賞をとおして、長唄のよさにふれるとともに、授業に生かせる指導のポイントを学びます。

先日、第 1 回の実行委員会を開催しました。委員一同、よい講座となるよう、工夫していきたいと思えます。会員の皆様のご参加を、心よりお待ち申し上げます。

なお、参加申込みの手続きや、内容の詳細につきましては、5 月下旬に立ち上げる予定のワークショップ・ホームページにてお知らせしていきます。今しばらくお待ちください。

ワークショップ実行委員：本多佐保美（千葉大学）、寺田己保子（埼玉学園大学）、桐原礼（帝京大学）、榎本深雪（千葉大院生）、藤田美紀（千葉大院生）、吉原千嘉子（千葉大事務補佐員）

4-3 編集委員会報告

編集委員会委員長 尾見 敦子

本年度第 4 回編集委員会は、2014 年 2 月 16 日（日）に東京藝術大学で開催されました。委員会の報告、協議内容は以下の通りです。

1. 『音楽教育実践ジャーナル』への新規投稿は「論文」が 8 本で、審議の結果、4 本が再査読、4 本が不採択となった。『音楽教育学』は再査読になっていた 3 本の「研究論文」の内、2 本が採択され、『音楽教育学』第 44 巻第 1 号に掲載されることになった。他の 1 本は不採択であった。『音楽教育学』への新規投稿は「研究論文」が 3 本、「研究報告」が 1 本で、審議の結果「研究論文」2 本、「研究報告」1 本、計 3 本が再査読、「研究論文」1 本が不採択となった。
2. 『音楽教育学』第 44 巻第 1 号の「研究動向」については「幼児と音楽」をテーマに 3 本を依頼済みである。『音楽教育実践ジャーナル』vol. 11 no. 2（通巻 22）（特集「音楽教育と電子テクノロジー」）は、特集企画が 91 頁、特集投稿が 35 頁、1 年分が no. 2

に集中的に掲載となった自由投稿が71頁で、204頁の大部となった。vol. 12 no. 1 (通巻23) (特集「音楽教育におけるリズム活動を再考する」)の企画部分が進行中である。vol. 12 no. 2 (通巻24)の特集テーマは「授業をクリエイトする—音楽の本質をめざして—」に決定した。新締め切りが適用となるので、特集投稿原稿の締め切りは8月15日である。

3. 荒川恵子委員から、副委員長就任後の諸事情の変化により、その任を辞退したいとの申し出があった。急遽、永岡都委員を副委員長代理に選出し、次期委員会への円滑な引継ぎを行っている。

【投稿時のお願い】投稿の際は、『音楽教育学』と『音楽教育実践ジャーナル』のいずれか、ふさわしい方を選び、「投稿の手引き」を参照してください。

さて、今回が今期編集委員会(2012-2013)の最後の報告となりますので2年間の総括を書きたいと思います。2年間に発行した8冊を振り返りますと、「音楽教育の理念としての『多文化共生』を考える」「カリキュラム研究—生涯学習としての音楽の学び」(『音楽教育学』「研究動向」のテーマ)、『『評価』再考』「音楽教育におけるアウトリーチを考える」「音楽教育とジェンダー」「音楽教育と電子テクノロジー」(『音楽教育実践ジャーナル』の特集テーマ)と、本当に音楽教育全般にバランスよく目を向け、社会と関わり、時宜を得たテーマに次々取り組み、発信し続けたことに、本学会の底力を感じます。「大会発表をもとに投稿を」と呼びかけ続けた結果、2誌への投稿数は確実に増えました。年4回の締切日の設定(2014年度から施行)によって査読を要する投稿の採否の審議までの期間の短縮化を図りました。投稿から掲載までの期間の短縮化を次期に託します。

2年半前に『音楽教育学』に新たに設けられた「論考」への投稿は1本もなく、2年間4冊に若手による論文が4本掲載されたに留まりました。「論考」は「学術論文としての体裁はとらないものの、学会誌にふさわしい内容の音楽教育批評、評論、論述」をさします。ですので、本学会を牽引してこられた諸先輩や中枢の現役諸役員の方々が率先して「論考」等に投稿くだされば、執筆層の厚い学会誌が実現するでしょう。

「ジェンダー」「電子テクノロジー」のジャーナル特集企画には、多くの非会員が登場し、新たな認識や知識をもたらしてくれましたが、一方、取材や原稿料で編集費を例年より押し上げました。「企画する編集委員会」「質を落とすことなく掲載率を高める」「編集委員の負担軽減」はどれも前期編集委員会(2010-2011)から引き継いだ方針ですが、年4冊の学会誌の発行は重労働で、編集委員は働き詰めで疲弊したことも確かです。本務をこなしながら「質を落とすことなく」を支える編集委員の「縁の下の働き方」は実際、限界に近いものがあり、3つの原則のバランスをどうとていけばよいかの喫緊の課題です。学会誌編集の抜本的見直しを含む検討が常任理事会と連携してなされる必要があると思います。最後になりましたが、今期の編集委員のみなさまに心からの感謝を捧げます。どうもありがとうございました。

4-4 国際交流委員会から

国際交流委員会委員長 今田匡彦

国際交流委員会では、昨年度第12回音楽教育ゼミナール〈立教ゼミナール〉にて開催された「英語で研究を海外に発信しよう！」での成果を踏まえ、今年度も第2回セミ

ナーに向けての企画を立案中です。

2014年7月20日から25日、ブラジルのPorto AlegreにてISMEが開催されます。Observer参加の申込みは以下のサイトをご参照下さい。

☞ <http://www.isme.org/presidents-welcome>

2014年10月18日と19日の両日、弘前大学創立50周年記念会館みちのくホールにて、音楽教育の国際シンポジウム、Hirosaki University International Symposium, “Proposing a New Music Education View Through Non-European Sound Practices”が開催されます。海外からの招聘研究者は以下の通りです。

Henry Johnson (University of Otago, New Zealand), Lauri Vakeva (Sibelius Academy, Finland), Chi Cheung Leung (Hong Kong Institute of Education, Hong Kong), Anita Prest (University of British Columbia, Canada)

☞ 詳細は次のところへ：今田匡彦(timada@cc.hirosaki-u.ac.jp)

～「音楽教育実践ジャーナル検討委員会」の設置について～

2月22日開催の第4回常任理事会にて、「音楽教育実践ジャーナル検討委員会」の設置が決まりました。設置の趣旨は、発刊後10年以上を経過したことに鑑み、ジャーナルの性格やあり方について検討するものです。委員会の構成は以下を予定しています。

今川恭子、奥忍、加藤富美子、水戸博道、三村真弓（次期常任理事の編集委員会担当）、次期編集委員会委員長

5 事務局より

5-1 お知らせ

1. 第45回大会に関するお知らせ

第45回大会は、10月25日（土）・26日（日）に聖心女子大学で開催予定です。多数のご参加をお待ちしております。研究発表をご希望の方は、同封の応募要領をよく読んでお申し込みください。なお、研究発表に関する情報は、随時学会ホームページ上でお知らせをしていきます。

2. 会費納入のお知らせ

年度会費の納入をお願いいたします。納入期限は5月31日です。期限内に会費を納めなければ、その後の送付物、研究発表や論文投稿に支障が出る場合があります。なお、2年間会費を滞納すると自然退会となりますのでご注意ください。

3. 『音楽教育学』『音楽実践ジャーナル』のバックナンバーを販売しております。お得なセット販売も行なっております。詳しくはホームページをご覧ください。

【重要なお願い】

会員情報管理システムでは、皆様のEメールアドレスをご登録戴くことが重要です。まだご登録戴いていない方は、速やかに事務局にご連絡ください。

◎事務局開局時間

月・水・金 9:00～15:00

時間外のご用件はE-mail (onkyoiku@remus.dti.ne.jp) へ

◎事務局員

事務局窓口担当：亀山さやか・坂本友里

ホームページ担当：長山弘



～スタッフより～

お陰様で第20期も無事に終りを迎えようとしています。二名のスタッフで至らぬ点多いかと存じますが、第21期も気持ちを引き締めて参りますので、どうぞよろしくお願ひいたします。(亀山・坂本)

……………【編集後記】……………

早いものでこの2013年度もあっという間に終りに近づき、また新しい出会いの季節を迎えようとしています。この一年は、台風や大雪といった自然の脅威と同時に、四季の移り変わりの美しさ、不思議さを改めて感じた年でもありました。ある先生が講演の中で、「美しい四季の移り変わりの中で、それに寄り添い、その時々を題材を用いながら保育がなされてきたこと。決して派手ではないけれど、それが日本の保育の良さです」と仰っていたことを思い出します。(長井覚子)

トリノ・オリンピックでは選手達の音楽の活用法が話題となりました。競技中もイヤホンで音楽を聴き続けるというスノーボードの選手には驚きました。バブルの頃はスキー場に行くと音楽が賑やかにゲレンデを盛り上げていましたが、近年は、自然を肌で感じてほしいとの配慮や、音楽の嗜好の多様化の影響もあってか、音楽を流さないところも多くなりました。スポーツの世界でも、音楽との関わり方は時代によって変化していくことを実感します。

今年度も、会員の皆様からたくさんのご寄稿をいただき、ありがとうございました。ぜひ来年度も、イベント・研究会等の報告や新刊・近刊図書を紹介などのお知らせをお寄せ下さい。お待ちしております。(志民一成)